

橋詰良一 著

「家なき幼稚園の主張と実際」

より (九)

第十四 手技としての自然物利用

自然物を恩物材料として利用することは古い先生たちの考慮からもしばあふれ出たものであります。大阪では幼稚園の古老としてあがめられている膳たけ子さん等は、最も有力な首唱者で各地の子供界から送って来る木の実、草の実、貝がら等をさまざまの手技に利用してたびたび参観者を驚かされたものであります。

自然のうちを保育室とする私たちの幼稚園でこそ一層この方法が便宜でもあり有力なもので、私の園の先生たちも常にいろいろの工夫をめぐらして子どもたちを喜ばせてきました。その自然の研究を折々に報告してくれる若い女性たちの手紙の一、二節を参考にご記しておきます。

○
自然物といっても矢田はどっちを見ても畑ばかりで樹木はもちろんかぞえるほどですし草といっても芝のようなほんの短かい草ばかりであんまり取り立てていうようなものはありませんが、春から夏にかけてカエルやバッタがたくさんおります。カエル取り、バッタ取りは子どもの大変喜ぶところです。

○
去年の春子どもたちがカエルをつかまえてそれに糸をつけて軽いもの、たとえば折紙や紙箱のようなものをくくりつけて、カエルがそれをひっぱるのを見て喜んでいふのから思いついて、大きな紙でカエルを折ってその中にほんものカエルを入れてとばせてやると大喜びで、毎日々々カエルを折ってくれ折ってくれとせがまれました。少々残酷ですけれど……。

つばなの葉が紅くなって晩秋から初冬のころでありました。あの広いしば原で遊んでいる時、その紅く染まった葉を、子どもの手首に巻いてむすんで、それをうで時計ということにしました。みんなが、それはよるこんでそのころはあすこに行くたびにむすんでいました。両方の手首にまで。はじめにとよちゃんにむすんであげたように覚えます。何でもないようなものです。けれど、子どもにとっては！

その時うれしく思いました。

自然物利用の実例

自然物をいろいろに利用していく幼児生活の二、三例を写真によって説明してみましよう。(写真はコピーが不鮮明のためはぶきます。編集部)

(A) はクレオンの自由画に自然物を結合したものです。どんな自然物でも紙にはりつけて絵にするか、板へ並べて絵にするようなことを知らせると、幼児は実に喜んで盛んに応用を始めます。クレオンなどの用具がまた別の用具(自然物)と変化すること、それ自身にも興味があるとみえて喜んでいろいろのものを採集し、その形状、色沢などを仔細に観察します。そして日を経るままに色の変化することなどを無言のうちに悟りま

す。

この絵は「家とお庭の木」だそうです。奇想天外より下の観があります。屋根は柳の葉、床は笹の葉、電燈は草の花、戸の引手も花、庭の樹はクローバーの葉です。

(B) は馬に乗った人で、草で作った人が乗せてありますが、邪魔くさくなつたとみえて、足はクレオンで描いてあります。

(C) は「雀のお宿」だそうです。草の穂や葉で家ができており、人ほもみじの葉で、頭は草の花です。雀のおどっているところらしいですが、おもしろいじゃありませんか。

(D) は「家の庭」です。庭木が風吹きのように見えるのに私は感心してしまいました。そんな形の草を見てから思いついたらしいです。

(E) は栗の葉の枯れて落ちたのを拾って来て、紙において、頭をひねっているところへ、先生が絵をすかすようなヒントを与えてみると、いつの間にか、こんなもの(「ドングリノハノウチワ」)ができたのだそうです。

(F) は松の皮です。幼児の鋭い観察は松の皮に対して実に驚くべき類似を発見いたします。類似というよりも幼児はそれ自身がまさしくそのように動いて見えるのでしょうか、そんな興味にひかれひかれながら神のささやきを聞くような幼児の詩的

生活を考えていますと、ただもう拜まされるばかりです。ここに書いた名は、その形にふれて、幼児の口走ったまを先生が控えておいたものですが、なんという想像の豊かさでしょう。

(モンキー、赤ちゃん、カエル、おじいさん、魚、金魚、ハト、牛)

野を走り回る子どもの記章

野を走り回る私の子どもの園には、ぜひとも子どもの記章がいります。園とか園児とかを知らせるための記章ではなくて、ひとりひとりを明示するための記章がいます。

記章というものは大抵その学校その園を誇示するためのものが多いけれど、私の希望するものはひとりひとりを明示するものでなければなりません。姓名札は大人に有効なだけで、幼児自身は何にもなりません。そこで考えたのが図のような記章で、幼児は色と形で、大人は裏の姓名の文字で、わからせることにしたのです。(図、省略)

円と三角と、四角とに六色をぬれば十八の変ったものができます。それに半分ずつ白を配すれば、また違ったものが十八できます。色を線にして一本筋にしたり、二本筋、三本筋にしたり変化していけば、いくらでもできます。

ついでにこの記章を呼ばせるうちに色彩観念を幼児から正しくしていくにもよいと考えました。

「三角のみどり」「四角のむらさき」「円に赤と白」「三角にかは」と白「呼ばせているうちに」「青」「みどり」「むらさき」「黄」「赤」「かば」の色を明確に観念を得させるのです。

この記章を園と家庭の間を連絡するスタッフにして、これを持たずに出園すれば必ず取りに帰らせる、これを持たずに帰宅したら必ず園へ貰いに戻らせると定めておいて園では朝にまとめておいて山や野からの帰りに分配するのです。

第十五 雨の日のお遊戯

雨の日は、静かに社殿や絵馬堂の下で手技をさせたり、画をかかせたり、または唱歌、舞踊などを特に多く教うればよい日だと予想しておりました。

しかし、実際はそれと反対で、子どもは陰うつうちに小さな場所へとじ込められるため、かえって焦燥の気に耐えられぬもたえを覚えます。

殊に、六月ごろの梅雨期になると、何日も何日も、この焦燥をつづけてついには狂犬のようにかみ合うばかり闘争を始めます。こんな時静かな鑑賞を要する蓄音機など聞かせてやっても更に効

果はないのです。

私は、このような場合に、防水具をまとって、雨の中へ飛び出すことを、希望する子どもの要求のままにどしどし雨のさんざと降る中をびしょぬれになって走り回らせます。それを見たある母さんは、風邪をひかないかと、案じておられました。が子どもの汗をかいて走るような時には、決して感冒などにおかされるものではなく、むしろ室内に入って静かにしようとする時が注意を要する時で、あらかじめ汗などをよく拭いてやるのがよろしいと、医者はいっておられました。

雨衣を着て、雨の中を走り回る幼児、これはいかにも粗暴な扱い方のように見えますけれども、私は一種のうっ散法として重用しております。

この雨の中の遊び、雨衣を着たままの遊びには、いくらもうくとも工夫する別の世界があると思います。

第十六 健康上の効果

家なき幼稚園の効果を、何よりも手短かに見ていただくことのできるものは、健康上から眺めたものでしょう。

フロエベルは幼時のうちにこそ大自然のうちを遊び回らせて、その自然から神の靈に達せしめよ、というようなことを祈ってい

るけれど、やはりルソー等のいうように、幼児を自然のなかにおいて、大気のうちを走り回らせるのは健康の上に大きな期待をもったことは明らかであります。野の幼稚園も実にこれを第一として相応に注意を払ってまいりました。

友人の医学博士木下東作君が、創設の翌年に池田へ来て、幼児たちを眺めてくれた時の声として私を喜ばせてくれたものは、

子どもたちの健康状態の非常に良好なものには驚いた。しかも概して都会人の子、すなわち虚弱の体質をもっているにもかかわらず、発育の良好なのはふしぎなほどだ……

という言葉でした。その時の感嘆状が今見当たらないためにこの書中に収めるの光栄から逸したのは遺憾ですが、素人目からもわが子どもたちの園の幼児たちは、健康上から見た場合だけはある種の効果を確認することができると思います。

(このあと、大阪家なき幼稚園の園医の細かい報告があります
が略します)

本園の健康書類、何につけても簡単に喜ぶ本園に不似合いなほどてい重にしてあるものは健康診断に関する書類です、なかでも左の二つ(健康しらべ、口腔検査票の実物)うつしがあります(省略)は非常に重視しているものです。

(つづく)